

平成 26 年度 教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	26K17	氏名	紅谷 昌元
研究主題 —副主題—	教員の指導態度が児童の学級満足度に及ぼす影響 —教員同士の授業のリフレクションを工夫して—		
所属校	日野市立日野第三小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>学校現場では、いじめ・不登校など生徒指導上の諸問題への対応、特別支援教育の充実など、複雑、かつ多様な課題に対応する教員の指導力が求められている。これらの課題に対応するためには、各課題への指導力の向上は必要だが、その前提として、全ての児童が学級内で認められていると感じ、全ての児童が安心して過ごせる学級をつくるのが基本であろう。そのような学級を実現するために、教員は自らの指導態度について日々模索している。</p> <p>教員の指導態度については、児童の学習意欲と教員の指導態度との関連性において、教員のAD指導態度測定尺度（以下、AD尺度）が作成され、受容が高い教員の学級の児童の学習意欲が有意に高いことが明らかにされている。</p> <p>また、児童の学級満足度を測定するために標準化されたQ-U尺度が作成され、教員のリーダーシップとの関連を指摘している。</p> <p>このように教員の指導態度と児童の学級適応や学級満足度との関連は明らかにされてきたが、教員の指導態度に課題を見出し、それを改善していくためには、日常の実践の中で、教員自身が指導態度について有効なリフレクション（省察）を行い、日々修正をしながら教育活動を推進していく必要がある。そして、実りあるリフレクションを行うためには、教員それぞれが個々にリフレクションするのではなく、同僚と協働し、自身の指導態度について相互に省察しながら学び続けることが不可欠である。そのためには、教員が教室を閉ざすのではなく、専門家として相互に学び合う関係を築き、授業を公開し合うことによって、同僚性を高め、より質の高い授業へと転換していくことが必要である。</p> <p>そこで、本研究では、授業について同学年の教員同士が短時間で相互にリフレクションを行う機会を設け、リフレクションの際に相互のフィードバックの仕方に工夫を講ずることによって、教員の指導態度に変化が生じるか、その変化が児童の学級満足度の向上に変化を及ぼすのかについて明らかにするとともに、リフレクションの望ましい方法についても明らかにすることとした。</p>
II 研究の方法	<p>1 質問紙調査および対象</p> <p>以下に示す調査対象校の児童に、教員の指導態度と児童の学級満足度に関する質問用紙による意識調査を行うこととした。</p> <p>○質問紙調査の期間および対象</p> <p>実施期間：第1回目 平成26年9月中旬（リフレクション前：pre-test） 第2回目 平成26年12月中旬（リフレクション後：post-test）</p> <p>実施対象：公立小学校 中・高学年 各2学級 合計4学級 児童128名</p> <p>2 対象教員への聞き取り調査</p> <p>調査対象校の教員4名に協力を依頼し、担任から見た学級の現状の課題を聞き取り、教員の目から見た児童の実態を事前と事後で調査することとした。調査は、リフレクションを開始する前の9月中旬と、終了後の1月初旬に実施した。</p> <p>3 リフレクションの方法</p> <p>基本的に週に一回程度、対象教員の授業を観察者がそれぞれ10～15分程度ビデオ撮影などをしながら、授業観察を行った。対象教員の授業をビデオで撮影することによって、授業を視覚的に観察できるようにし、リフレクション時に活用できるようにした。</p> <p>撮影したビデオを基に、対象学年の教員二人で相互にリフレクションを行ってもらった。その際、気付いたことがあれば観察者からもアドバイスをした。そこで、指導技術や児童への対応についての課題や改善点を見出し、次回の授</p>

	<p>業に生かしていくという手続きを取った。</p> <p>以上の方法を取ることで、今後、第三者がいなくても対象学年の教員だけでリフレクションを行うことが可能ではないかと考えた。</p>
<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>約3か月間の授業観察と教員同士のリフレクションを行った後、児童への質問紙による事前調査と事後調査の変化を分析した。事前調査、事後調査ともに回答があった有効回答数は127名であった。事後調査も事前調査と同一の調査用紙を用いた。教員の受容的な指導態度と要求的な指導態度に変化があったのかについて事前・事後で対応のあるt検定を行った。</p> <p>その結果、受容では4学級の平均得点で、1%水準で有意な上昇が見られた($t(126)=3.00, p<.001$)。学級別では、A学級とC学級が5%水準で有意に上昇し(それぞれ、$t(33)=2.56, p<.05$; $t(27)=2.16, p<.05$)、B学級は10%水準で上昇に有意傾向差が見られた($t(34)=1.93, p<.10$)。このことから、この期間にA学級とC学級の教員の受容的な指導態度は上昇し、B学級については上昇傾向が見られたと言える。</p> <p>一方、要求の平均得点は、B学級のみで5%水準で有意差が見られ($t(34)=2.46, p<.05$)、要求的な指導態度に有意な上昇が認められた。</p> <p>児童の学級満足度の変化は、変化が見られたかについて検討するために対応のあるt検定を行ったところ、C学級、D学級共に、承認に10%水準で有意傾向が見られ(それぞれ、$t(27)=1.75, p<.10$; $t(28)=2.01, p<.10$)、4学級のうち2学級で児童が承認されていることが上昇傾向にあることが認められた。</p> <p>教員の指導態度の変化は、受容、要求の双方が上昇することが、学級満足度の承認を有意に上昇させることと関連があることが示された。</p> <p>このことから、教員の受容と要求の指導態度が向上していると児童に認識されることは、本研究の実施期間の3か月の間では、児童の学級内での承認の上昇と関連していたと言えよう。このことは、リフレクションの結果で生じた教員の指導態度の変化が、学級満足度の承認に好影響を与えると推測できる。</p> <p>この結果を踏まえて、教員の指導態度について、リフレクションとの関連で事後に聞き取った。4名のどの教員の報告からも、リフレクションで話し合われた内容を意識し、その内容が教員の指導態度に反映されたことが示唆されていた。そして、教員の指導態度の変化に関する自己報告は、AD尺度上の教員の指導態度についての児童の評価に反映されたと理解することができよう。</p> <p>4学級の中で特徴的な動きを示したのは、C学級とA学級である。先に示したようにC学級は、児童が捉えた教員の指導態度は良好に上昇し、学級満足度の承認得点も有意傾向で上昇が見られた。それにもかかわらず、被侵害行為に変化が見られなかった。</p> <p>一方、A学級は、リフレクション前後で児童から見た教員の受容的な態度が有意に上昇し、要求的な指導態度も若干上昇しているにもかかわらず、Q-U尺度の承認得点と被侵害得点にはほとんど変化が見られなかった。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>本研究では、教員の指導態度が児童の学級満足度に及ぼす影響を、教員同士の授業のリフレクションの工夫を通して検証したが、少なくとも教員の指導態度には良好な影響を与えたと言えよう。また、教員と児童だけではなく、教員相互の人間関係も向上できたように思われる。</p> <p>しかし、教員の指導態度の変化が学級満足度の変容に結びつかない場合もあった。その理由として、必ずしもこの変化が同時期に生じるものとは限らないことが考えられる。また、研究実施上の課題としては、毎週決まった曜日にしか調査対象校に行けなかったため、対象教員のどちらかに出張や急な会議などが入り、二人ともそろうということが少なく、相互のリフレクションの機会が限られたことが挙げられる。そのため、教員相互によるリフレクションの時間を十分確保することができなかった。</p> <p>教員が日々の教育活動に追われる中で、同僚と効率的に相互のリフレクションを行い、教員の指導力を向上させていくための更なる工夫と検討が必要となってくるであろう。</p>

